

エコシステム構想と実存的支援技術

——「価値→知識」に位置づけられた技法を中心に——

安井理夫

I はじめに

太田義弘によるジェネラル・ソーシャルワークは、社会福祉をハード福祉とソフト福祉に分類し、ソフト福祉であるソーシャルワークのなかに、ハード福祉である制度・政策へのフィードバック機能を包括・統合したソーシャルワーク理論である⁽¹⁾。この考えは、ソーシャルワークの教科書や専門書などにも取りあげられている⁽²⁾ことから、一定のコンセンサスを得ていると考えられる。

このアイデアの特徴のひとつは、理論と実践をつなぐものとしてエコシステム構想が提示されていることである。これは、システム思考と生態学的視座を統合したエコシステム視座をベースにして開発された支援ツールを介して、利用者固有の生活コスモスをビジュアル化して共有することで、参加と協働にもとづいた支援過程を科学的に展開していこうとするものである⁽³⁾。

しかし、その研究は、独自の支援ツールの開発を中心に進められてきたため、実践における支援技術や利用者の実感を科学的にアセスメントする指標などに関心が向けられるようになったのは比較的最近のことである。筆者は、これまで、このようなエコシステム構想における利用者中心の支援技術を、実存性というキーワードから体系化する試みを行ってきた⁽⁴⁾

が、技法レベルでは、既存のアプローチや心理療法のものを援用したため、それらがどのようにエコシステム構想の発想に根ざしているのかがわかりにくいと指摘されることがある。

そこで、本稿では、実存性というキーワードのもとに、エコシステム構想がどのような知識にもとづき、それぞれのアプローチやそれらにもとづいた技法がどのように位置づけられるのかを示すことで、ソーシャルワークにおけるエコシステム構想の意義を考察してみたい。それは、たとえばケアマネジメントに代表されるような制度運用の技術に矮小化され、利用者中心といいながら援助者の枠組みから援助を展開していこうとするソーシャルワーク理論や、さまざまなアプローチの位置づけを明確に示さずに並列させながら、もう一方では、包括・統合化を志向したジェネラリストの立場からの援助を提唱する厚生労働省の指導要領など、荒唐無稽という他ないオリエンテーションに対して、ソーシャルワークを、固有の価値・知識・方法にもとづいた支援として提示するためのチャレンジだと考えるからである。

II エコシステム構想のアイデアと実存的支援技術

1. ジェネラル・ソーシャルワークとエコシステム構想

まず、手始めに、ジェネラル・ソーシャルワークが、どのような発想にもとづいているのかを確認しておきたい。表1は、太田がそのアイデアを8つの項目から説明しているものをもとにして、そこからキーワードと考えられるものを抜き出したものである。

これらのキーワードを、支援の構成要素である「利用者、支援者、支援関係」という枠組みから再構成してみたものが表2である。

これをみると、支援ツールによって利用者の生活コスモスをビジュアル化し、それを利用者と支援者が共有することで、参加と協働にもとづいた

エコシステム構想と実存的支援技術

表1 エコシステム構想のアイデアと鍵概念

	エコシステム構想の発想（太田による出典1）	キーワード
①基本	利用者中心の立場より利用者と環境からなる固有な生活世界 cosmos への視野と発想をもつ生活概念	生活コスモス
②目的	より豊かな社会生活の回復・維持・向上と自己実現への支援を目指した生活支援概念	自己実現
③体系	利用者のニーズに焦点化し生活コスモスという視野から方法レパトリーの固有な体系の構成と活用	体系の構成 方法レパトリー 活用
④焦点	利用者と環境への視野から社会福祉諸サービスの提供を通じた具体的課題の解決	社会福祉諸サービスの提供 具体的課題の解決
⑤形態	利用者とソーシャルワーカーの参加と協働を可能にする支援ツールの活用と支援への科学的方法の展開	参加と協働 支援ツール 科学的方法の展開
⑥方法	支援という利用者のもつ自己統制力や生活コスモスの育成を意図した社会的自律性の支援	支援 社会的自律性
⑦特性	支援サービスと環境調整からなるフィードバック機能が循環する包括・統合的な支援活動	フィードバック機能 包括・統合的
⑧過程	実践の専門性と科学性を構成する支援局面の深化と展開、実存的参加の推進と成果の循環する生活支援過程	実践の専門性と科学性 実存的参加

出典1 太田義弘「ソーシャルワークの特性と固有性」太田義弘編著『ソーシャルワーク実践と支援科学—理論・方法・支援ツール・生活支援過程—』相川書房 2009年 4頁

表2 支援ツールを中心にしたエコシステム構想のアイデア

分類	焦 点	目 的
利用者理解	生活コスモス 自己実現 社会的自律性	科学的方法の展開（支援ツール） 実践の専門性 具体的課題の解決 <u>実存的参加</u>
支援関係	支援 参加と協働	
支援者の技術 （手段）	方法レパトリーの活用	
	社会福祉諸サービスの提供	
位置づけ	方法レパトリーの体系の構成 包括・統合的	

（安井理夫 2009年）

支援過程の展開が可能になるというのが、エコシステム構想の基本的なアイデアであることがわかる。支援ツールは、ソーシャルワーク固有の視野と発想を構造的にまとめたものであり、これを用いることで、生活の広がり（システム）と、利用者システムの時系列変化（生態学的視座）をビジュアル化して示すことができる。

ただ、この表のうち下線を引いたゴシック体の2つ、すなわち「実存的

参加」と「方法レパートリーの体系の構成」というアイデアに関しては、そのような支援の展開を可能にするような技術が必ずしも具体的に示されているわけではない。そこで、前者については次節で、後者については第3節で考察していきたい。

2. エコシステム構想と実存性

ここでの課題は、エコシステム構想に固有な技術を作り出すことではなく、この構想にマッチする基礎理論（人間観・社会観）をどのようにデザインできるのかということである。なぜなら、Ⅲで詳述するように、それぞれ独自のアプローチであっても、ある共通したアイデアに依拠していることが少なくないからである。したがって、この構想にもとづいて（ひとつの統一原理で）、既存の技法を秩序立てて組み合わせる方法が適切だと考えられるのである。

そこで、本節では、(a)ソーシャルワークの知識にもとづいた利用者理解、(b)ソーシャルワークの価値にもとづいた支援関係、(c)それらにもとづいた支援技術の3つについて順番にみていくことにしたい。

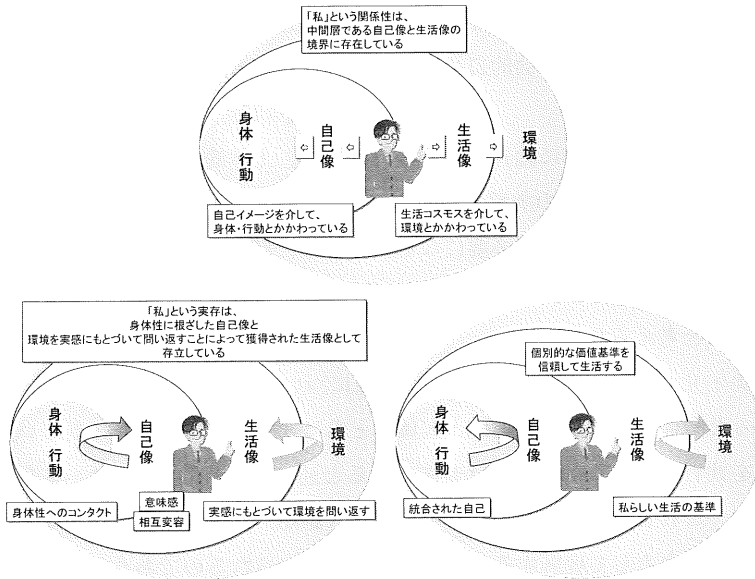
表3は、表2に対応するかたちで、実存性を裏打ちできるような支援技術を付け加えてみた（下線を引いたゴシック体の語句）ものである。

表3 実存性からみたエコシステム構想のアイデア

分類	焦 点	目 的
利用者理解	生活コスモス 自己実現 社会的自律性 <u>Human Criteria</u>	支援ツール（構造的理解）
支援関係	支援 参加と協働 <u>共有と共生</u> <u>実存的支援技術</u>	科学的方法の展開（専門性）
支援者の技術 （手段）	方法レパートリーの活用 <u>局面に応じた体系的な組み合わせ</u>	具体的課題の解決
	社会福祉諸サービスの提供 <u>支援展開＝フィードバック（問い返す過程）</u>	実存的参加（ <u>様式的理解</u> ）
位置づけ	方法レパートリーの体系の構成 包括・統合的 価値や知識を共有するアプローチの位置づけ	

（安井理夫 2009年）

図1 自己像、生活像と身体・行動、環境の関係と社会的自律性、自己実現



(安井理夫 2008 年)

まず、利用者理解について。図1は、利用者の生きている世界と社会的自律性、自己実現の考え方を示したものである。

利用者の生活は、自己像、生活像という2つのイメージと、(a)身体・行動と(b)環境という2つの(客観的)現実から構成されている。そして、私たちは、客観的な現実ダイレクトにかかわっているわけではなく、「現実」として認知されたイメージに対して働きかけている(図1の上のものを参照)。つまり、石があるからつまずくのではなく、「石がない」という見通しのもとに歩いていたらつまずいたのである。つまり、認知と現実とがずれている(一致していない)とき、私たちは、現実に対して有効な働きかけができず、予期しない結果が返ってくるため、対処方法がうまく機能せず、生きていくことに何らかの困難を感じることになる⁽⁵⁾。

したがって、自分自身の働きかけに対して効果を実感して生活できる

(効力感) ためには、認知と現実がある程度一致していることが必要になる。したがって、このようなずれに対して意識的にかかわり効力感をとりもどしていくことが社会的自律性の基礎になると考えられる（図1の左下のものを参照）。

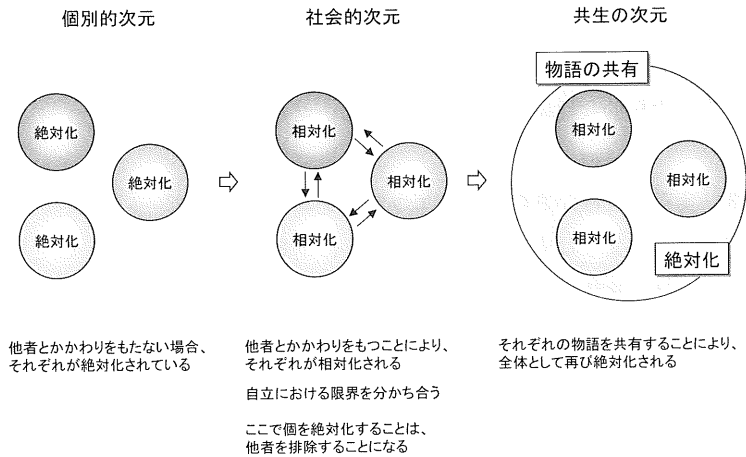
また、所与の現実には翻弄されるのではなく、主体的に生きていくためには、向き直り、自己の実感を尊重しながら、現実を問い返し、「今—ここで」納得していく作業が必要になる。つまり、自己実現とは未来にある何かではなく、このような「今—ここ」の積み重ねのなかから生まれてくるものだと考えられる。

ティリッヒ（Tillich, P.）は、実存性について、主体性と責任性をともなった関係性のなかで、主体と客体がともに変化し、そのなかで新しい意味を共有していくようなプロセスであると述べている⁽⁶⁾。つまり、実存性とは、これまでみてきたようなイメージ（認知）と客観的現実をつなぐための鍵概念として理解することができると考えられるのである。

ただ、このような「生活」は、利用者にとっては具体的でリアルなものであるが、それを他者が理解するのは容易ではない。したがって、このような「生活」をビジュアル化し、利用者と支援者で共有するためのツールが、エコシステム構想における支援ツールである。

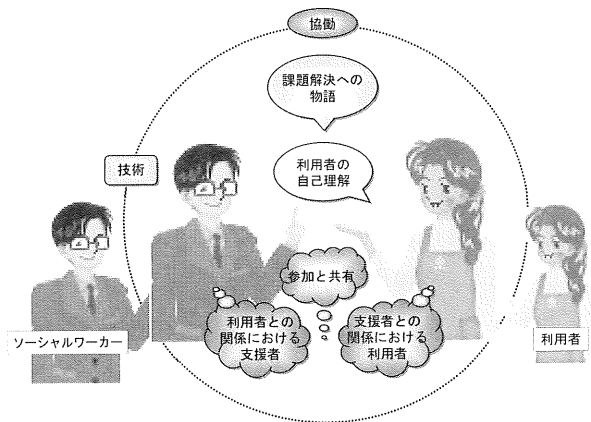
つぎに、支援関係について。この社会において、私たちがそれぞれかけがえのない存在として尊重されるような関係性や、それを保障できるような社会のしくみを作り出すことがソーシャルワークの価値である。しかし、何人かの人間が集まった場合、そのうちの誰か一人だけを無条件に尊重することは、それ以外の人たちをあまり尊重しないということでもある。したがって、おたがいが自律における限界を分かちあい、それぞれが合意できる内容を共有することが必要になる（図2を参照）。つまり、分かちあい共有しようとする意志が、ソーシャルワークがめざす社会関係や支援関係の前提となると考えられるのである。

図2 個別的な価値基準の共有



(安井理夫 2007 年)

図3 支援場面における参加と共有



(安井理夫 2007 年)

このアイデアをもとにすれば、支援関係は図3のようにビジュアル化することができるだろう。ここで、支援者が分かちあおうとするのはソーシャルワークの価値・知識であり、利用者が分かちあおうとするのは課題を抱

えた自分である。これらは「役割」と言い換えることも可能であるが、ソーシャルワークの枠組みにもとづいた、それぞれの分かちあおうとする意志を前提とした利用者と支援者の協働を可能にする技術こそが、ソーシャルワークの中核的な技術でなければならないだろう。

3. 実存的な確かさの指標とエコシステム構想

では、このような支援技術はどのように構想できるだろうか。ここでのポイントは、客観的現実と実感をつなぐものが実存性であり、それを裏打ちするような自己実現と社会的自律性の基盤となるような確かな「実感」を、どのように形成し、どう共有するかということである。

池見陽は、ジェンドリンの体験過程療法のアイデアをもとにして、実感の確かさを、言語表現のパターンや身体（筋肉）の緊張度といった客観的な指標からアセスメントすることが可能になる体験過程スケールの日本版を作成している⁽⁷⁾。これを援用すれば、実存的な実感を自然科学の基準を満たしたエビデンスとして主張することができると考えられる。そして、それをもとにして、自分自身のイメージ（認知）と身体・行動と環境といった客観的現実を問い直すことが可能になる。

したがって、次章では、エコシステム構想における科学化の指標である「ビジュアル化」と「共有」の2つに、「照合」と「体験過程スケール」の2つを加えた4つから、支援技術を考えていくことにしたい⁽⁸⁾。

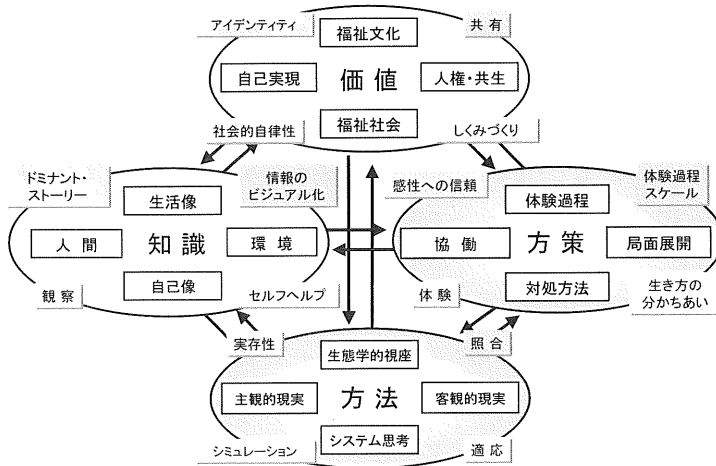
太田は、「方法レパートリーの体系の構成」を、直接援助技術・間接援助技術・関連援助技術に分類して示している⁽⁹⁾。これは、ミクロ・メゾ・マクロといったソーシャルワークのターゲットやプロセスによって方法レパートリーを体系化したものである。

ただ、実際の支援において、どのような技術をどのような発想のもとに組み合わせるのかという点については、それぞれの技術のもとになっている人間観や社会観、科学性を担保するための考え方などにちがいがあ

め、それらを包括・統合できるような上位のアイデアが必要になる。

そこで、筆者は、以前に、このような実存的支援技術を、太田が示したソーシャルワークの構成要素をもとにして、図4のように体系化を試みた⁽¹⁰⁾。

図4 技術の構成要素（マイクロ→メゾ）



（安井理夫 2009年改訂）

つぎの段階の課題は、このようなアイデアを実現するための支援技法を具体的に提示することである。ただ、支援技術は4つの象限の価値・知識・方策・方法で4通りのグループを形成しているので、紙幅の関係で、それらすべてについて考察することはむずかしい。したがって、本稿では、ソーシャルワークの主要なアプローチを視野に入れて構想した第2象限（左上）の技術について、具体的な技法も含めて検討していくことにしたい。

Ⅲ 「価値→知識」象限における技法分類

1. ソーシャルワークのおもなアプローチに共通する理解と方法の枠組み

前章では、エコシステム構想において実存的支援技術がどのような意義をもち、それをどのように体系化して示すことができるのかをみてきた。本章では、このうち、「価値→知識」の象限に位置づけられた技術を具体化するための技法に焦点を絞って考察を進めてみたい。ソーシャルワークとは、共通の価値にもとづいて知識（理論）と方法を発想するものであり、なかでも価値にもとづいた人間観と社会観をどのように理論化するのかは、方法を発想するうえでも極めて重要な課題だと考えるからである。

表4は、ソーシャルワークの主要なアプローチが、価値をどのような理論（人間や社会の理解の仕方）にまとめているのかを示したものである。この表のいちばん最初にあげたバイステック（Biestek, F. P.）は、個人の尊厳を守り（ヒューマニズム）、お互いの尊厳を分かちあうためのしくみを作っていく（デモクラシー）というソーシャルワークの価値から、7つの原則をまとめた⁽¹¹⁾。しかし、それがどのような理論（知識）にもとづいているのかは明確には体系化されていないと考えられる。したがって、この表に沿ってそれ以外のアプローチが立脚している理論を概観し、そこから発想された方法が価値とどのように整合しているのかを検討することにしたい。

機能派アプローチとおなじルーツをもつ⁽¹²⁾来談者中心療法では、自己概念と有機体感覚（身体性をともなった実感）をある程度一致させることが自己実現にとって重要だと考えられている。このようなアイデアは、メアーンズ（Mearns, D.）⁽¹³⁾が述べるように、承認の条件と評価の源泉という2つについて、他者や社会に依存するのではなく、それらを問い返し自律的なあり方をめざすために、本人の体験過程⁽¹⁴⁾を重視するのである。

表 4 主要なアプローチにおける基礎的な理解

バイステックの原則		
価値	知識	方法
デモクラシー ヒューマニズム		受容 非審判的態度 統御された情緒関与 秘密保持 意図的な感情表現 個別化 自己決定
来談者中心療法		
価値	知識	方法
承認の条件 (外的 vs 内的) 評価の源泉 (外的 vs 内的)	体験と切り離された自己概念 防衛による自己概念への固執 自己の体験に触れることが困難 (自己概念と有機体の不一致) 外的な承認の条件 vs 外的な評価の源泉 vs 体験過程	無条件の肯定的関心 (現にある姿を受容 自己受容へ) 共感的理解 (自分を体験過程に対して開放) 自己一致 (モデルを示す)
精神分析		
価値	知識	方法
取り入れ 過剰な社会化 反復強迫	超自我優位の精神力動 自我機能の相対的低下 自我の防衛機制 転移 超自我 vs 自我 vs エス 自我機能の強化 バランスの回復	フリー・フローティング・アテンション 自由連想 ワーキング・スルー ・歪曲・偽装されていた体験 (感情)の言語化 ・新しい対処方法の学習
ナラティブ・アプローチ		
価値	知識	方法
ドミナント・ストーリー vs オルタナティブ・ストーリー	社会とは意味づけ方をきめる約束事の総体 人間は物語としての自己を生きている しかし、すべての物語には何らかの偏りが存在する (例外) 社会の物語 vs 自己の物語 vs 例外	「無知の姿勢」 語られていないことから (例外)への関心 人はそれぞれに真実を抱えて生きている (相対化と絶対化)
ゲシュタルト療法		
価値	知識	方法
トップ・ドッグ vs アンダー・ドッグ イントロジェクション	選択のないイントロジェクション (取り入れ) 不統合 (中間層と現実 ことばと行動 など) トップ・ドッグ vs アンダー・ドッグ vs 選択 気づき 統合	チェアー・テクニク (今ここで体験すること) 観察 適切なバウンダリー (境界) の設定 コンタクト 気づき 選択
行動アプローチ		
価値	知識	方法
学習 オペラント リスポンデント モデリング	行動はすべて学習されたもの (価値に対してニュートラル) 不適切なものは学習しなおせよ (判断の基準が、外的なものか、内的なものか?)	強化と消去 新しい条件反応の形成 新しいモデルの提示

(安井理夫 2009 年)

精神分析は、心理社会的アプローチの基礎となっているものであり、ごくおおまかにいって、人間の精神活動を、超自我・自我・エスという3つの心的装置の関係として力動的に理解しようとするものである。これにはいくつかの学派があるが、心理社会的アプローチが影響を受けた自我心理学は、これら3つを統合する役割を担った自我の機能に関心を向ける。つまり、自我とエス、自我と超自我の関係に着目し、超自我やエスに翻弄されるあり方から脱却するために、自我機能の強化をめざすのである。とくに超自我には、今の社会で主流とされる規範や発想、これまでの人生で形成された自我理想などが含まれているが、これらは必ずしも本人が意識的に選択したものではないため、自我のコントロールを超えて自律的に働き、自我を脅かすと考えられている。

ナラティブ・アプローチは、ドミナント・ストーリーという支配的な認知方法を、無知の姿勢⁽¹⁵⁾によって「例外」にコンタクトすることによって対自化し、オルタナティブ・ストーリーを創造していくことをめざした支援方法である。

これらのアプローチでは、それぞれ、自己概念（来談者中心療法）、反復強迫（精神分析）、個人のドミナント・ストーリー（ナラティブ・アプローチ）という概念が用いられているが、これらは、ともに、いったんできあがってしまった自己認知はリアルなものとして排他的・自律的に機能してしまうとする点では共通していると考えられる（後述するゲシュタルト療法のトップドッグという概念も同様である）。したがって、方法としては、承認の条件と評価の源泉という2つの指標を軸にして、外的・社会的なものを無条件に取り入れるのではなく、内的・個別的な実感から問い返し、自律性を獲得していくこと（実際には感じているにもかかわらず気づかれなかった感情に焦点をあて、それと照合できるようにすること）が採用されていると考えられる。

また、これら3つのアプローチにおける無条件の肯定的関心、フリー・

フローティング・アテンション、無知の姿勢という方法は、ニュアンスのちがいはあるにせよ、それほど異質なアイデアではなく、このようなずれ（不一致）を問いつ返すためには、まず、利用者自身とその体験が尊重されるべきだというアイデアにもとづいていると考えられる。

このような方法は、個人の尊厳を守り、お互いの尊厳を分かちあうためのしくみを作っていくというソーシャルワークの価値と整合性をもった支援理論だといってよいのではないだろうか。

ゲシュタルト療法と行動アプローチの2つは、必ずしもこれらとおなじアイデアにもとづいているわけではない。しかし、前者は、「トップドッグ」と「アンダードッグ」⁽¹⁶⁾という2つのアイデアから、後者は、すべての行動は学習されたものであり、不適切な行動は新しい別の行動に学習し直せばよいという発想にもとづいており、現在の認知枠組みを対自化するという構造をもっている点では共通していると考えられる。

これらを総合すれば、価値としては、(a)自分自身の価値、(b)体験それ自体の価値、(c)分かちあおうとする価値の3つ、知識は、(a)個人、(b)対自化、(c)社会の3つから、方法は、(a)主体性、(b)責任性、(c)相互変容の3つのポイントからまとめることができ、その際、共有の基盤としては実感にもとづいた気づきが重視されるべきだということになるだろう（図4を参照）。

2. 伝統的なソーシャルワークの技法分類

では、このような価値・知識・方法にもとづいた方策（具体的な技法）はどのようにまとめることができるだろうか。表5は、この考察のために、ホルス（Hollis, F.）⁽¹⁷⁾とアイビー（Ivey, A. E.）⁽¹⁸⁾の技法分類を対照させるかたちでまとめたものである。

まず、いちばん上のホルスの「支持の技法」とアイビーの「かかわり技法」は、類似している点が少なくない。前述したバイステックの原則にも、そのほとんどが対応している。つまり、「ヒューマニズム」と「デモクラ

表5 ホリスとアイビーによる技法分類の比較対照表

ホリス	アイビー
(1) 支持の技法傾聴 受容 再保証（一般化を含む） 承認 肯定 激励 愛情の贈り物	1 (基本的) かかわり技法 かかわり行動（視線を合わせる 身体言語に気をくばる 声の調子（トーン） 言語的追跡） 会話への導入（開かれた質問 閉ざされた質問） 最小限度のはげまし
(2) 直接的働きかけ激励 強化 報奨 可能な行動の示唆 直接的助言 弁護的な行動 直接介入	3 積極的にかかわる技法 指示 論理的帰結 積極的要約 情報提供
(3) 探索および浄化法 焦点づけ 部分化 話題の転換 いい換え	1 (基本的) かかわり技法 かかわり行動（身体言語に気をくばる 声の調子（トーン）） 会話への導入（開かれた質問） 明確化 いい換え 要約技法 感情の反映 意味の探索と反映 2 焦点のあてかたの技法 クライアント 主題（あるいは問題） 他者 面接者 文化的・環境的内容
(4) 人と状況の相互交流の反省的話し合い 論理的な話し合いあるいは推論 説明 要約 一般化 いい換え <u>行動のデモンストレーション</u> 情報提供 <u>模擬実験（ロールプレー）</u> 教育 強化 明確化 対決	1 (基本的) かかわり技法 身体言語 声の調子（トーン） 明確化 いい換え 要約技法 感情の反映 意味の探索と反映 2 焦点のあてかたの技法 クライアント 主題（あるいは問題） 他者 面接者 文化的・環境的内容
(5) パーソナリティの反省的話し合い 明確化 解釈 洞察の開発	3 積極的にかかわる技法 論理的帰結 自己開示 フィードバック 解釈 積極的要約 情報提供
(6) 幼児期の反省的話し合い (4)(5)におなじ	4 直面化（対決）
(7) 環境調整 役割として資源の供給者、発掘者、創造者、解説者、調停者、および攻勢的介入者	3 積極的にかかわる技法 指示 論理的帰結 フィードバック 解釈 積極的要約 情報提供

（安井理夫 2009 年）

シー」という価値を現実化するための技法であると考えられる。

つぎに、「探索および浄化法」と3つのレベルの「反省的考察」は、「焦点のあてかた」、「積極的にかかわる技法」、および「直面化」にほぼ対応していると考えてよいのではないだろうか。これらは、実感形成を促進し、前述した承認の条件と評価の源泉という2つの指標を内的な実感に照らして問い直していくための技法である。

また、直接的働きかけと環境調整の2つはエンパワメントの技法としてまとめることができると考えられる。

斜体にして下線を引いた「行動のデモンストレーション」と「模擬実験（ロールプレー）」の2つは、次節で詳しく考察するが、この分類には収まりきらないため、「価値→知識」象限の技法からは除いておきたい。

これらから、この象限における支援技法は、(a)支持、(b)気づき、(c)環境への働きかけの3つにまとめることができると考えられる。表6は、これまで検討してきた技法を、この3つに分類してまとめたものである。

表6 エコシステム構想における支援技法（価値→知識）

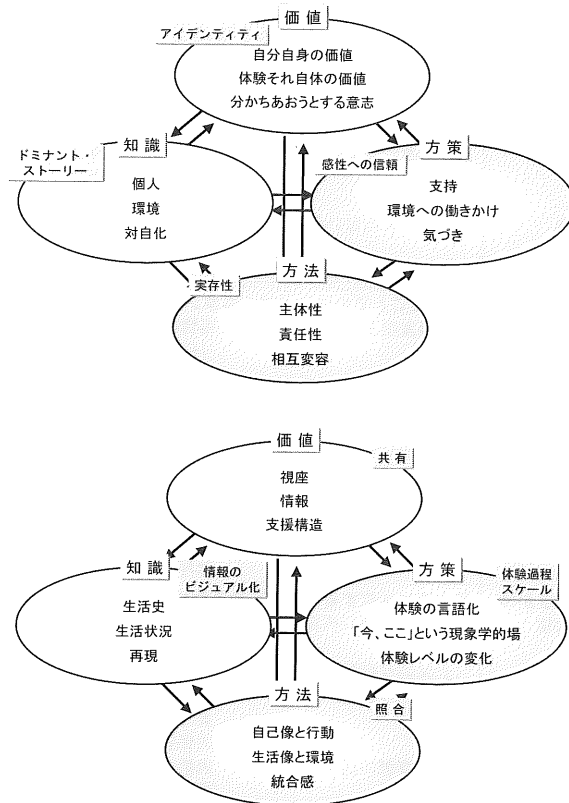
(1) 支持 傾聴	関心をもっていることを伝える (話の内容)	最小限度のはげまし 内容の反射 開かれた質問 閉ざされた質問
気づかい	(利用者の様子)	視線を合わせる 気持ちを気づかう (身体言語 声の調子)
愛情の贈り物	(かけがえのない存在)	再保証（一般化を含む） 承認 肯定 激励
受容	(ありのままの姿・気持ち)	無条件の尊重
(2) 気づき フィードバック	「今—ここ」での体験過程へのコンタクトをうながす (言語表現と体験過程)	感情の反射・リフレクション (伝え返し) 意味の探索 フォーカシング 自己開示
焦点づけ	(関心の喚起)	(利用者 主題 問題 他者 面接者 文化的・環境的内容 身体言語 声の調子)
積極的な照合	(例外へのコンタクト)	部分化 積極的要約 話題の転換 直面化 明確化、いい換え 洞察の開発
情報提供	(理解の枠組みを教える)	説明 解釈（転移関係を含む） 教育 一般化 強化（定着）
(3) 環境への働きかけ 対処方法の吟味	無力感に拮抗する思考・行動を勧め、環境を調整する (認知・言語レベル)	ソリューション・フォーカスト・アプローチ 論理的な話し合いあるいは推論
対処行動の提案 社会的弁護	(具体的な行動) (弁護的な行動)	可能な行動の示唆 直接的助言 指示 利用者の努力しても報われない、 または人権が侵害されている状況を 関係者や社会にしらせる
仲介	(社会資源の活用・開発)	供給者、発掘者、創造者、解説者、 調停者、および攻勢的介入者

(安井理夫 2009年)

3. 考察

本稿では、機能派アプローチ（来談者中心療法）、心理社会的アプローチ（精神分析）、ナラティブ・アプローチなどの価値・知識・方法にもとづいて、ホリス、アイビーの技法分類について考察し、(a)支持、(b)気づき、(c)環境への働きかけ、の3つにまとめる作業をしてきた。図5は、これまで述べてきた技法を前述した図4にあてはめてまとめたものである。

図5 ソーシャルワークの技法要素（「価値→知識」と「方策→価値」）



(安井理夫 2009 年改訂)

これらは、気づきにもとづいた認知の変化を中心にまとめられた技法群であるが、前述したように、この分類に収まりきらない技法も、ホリスやアイビーの技法分類には含まれている。それは、内的リアリティだけではなく、身体・行動といった外的・具体的で他者と共有可能なリアリティを視野に入れたアプローチである（図1を参照）。これには、2つの方法があり、ひとつはゲシュタルト療法であり、もうひとつは行動アプローチである。

まず、ゲシュタルト療法について。この特徴は、心とからだを別々のものとして考えるのではなく、統合されたひとつの全体ととらえ、「今—ここ」での具体的な行動にコンタクトをもつことを通して、今の自分のあり様に気づき、心とからだを統合した全体としての自分自身を生きていくための実存性に根ざした技術をもった技術にある。前述した表5にあった「行動のデモンストレーション」や「ロールプレー」は、単なるリハーサルと考えることも可能であるが、具体的に、どのような表情やしぐさ、声の調子で話しているか、話していることに表情やしぐさはマッチしているか、といったことがらを手がかりにして、身体性も含めたより統合された全体として自己をとらえる視点である。

つぎに、行動アプローチについて。前述した教育（学習 強化 報奨）にあたる部分を、さらにシステムティックに展開したものが、オペラント学習にもとづいた行動アプローチだと考えられる。また、系統的脱感作をはじめとしたリスポンデント学習を応用した支援技法や、モデリングや認知に焦点をあてた生活技能訓練（SST）なども、この分類に含まれるだろう。

このように、観察可能な具体的な行動に焦点をあてたアプローチは、その支援過程を科学的に展開するためのもうひとつの指標として、より詳しく考察される必要があるだろう。

また、主体性・責任性にもとづいた相互変容という実存的な視点は、こ

の象限では、たとえば、逆転移、スーパービジョンによる支援方針の変更などのことを指して、支援者としてのあり方への気づきがその中心的内容である。しかし、利用者の生き方や選択に感動したりはげまされる場合もあり、このようなことは支援者と利用者の対等性から発想された内容である。これは、「方法→方策」（第4象限）の技術であるセルフヘルプ的支援につながるものだと考えられる。本稿で述べた環境への働きかけの技法は、効力感の育成、オペラント学習によって学習された無力感を克服など、最終的にはセルフ・サポートをめざしているとはいえ、支援者の枠組みから考えられた働きかけであったが、分かちあおうとする意志（共有や共生）やエンパワメントといった契機を含めて実存性を考えることが、この象限における技術の課題になるだろう。

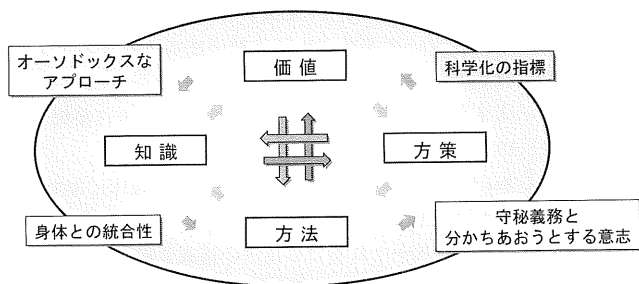
IV おわりに

本稿では、オーソドックスなアプローチにおける技法を、価値・知識・方法との整合性や統合性に留意しながら検討し、支持、気づき、環境への働きかけという3つのグループに分類して整理した。そして、この象限では、フィードバックの拠り所となる実感の確かさを、言語表現のパターンや身体（筋肉）の緊張度といった客観的な指標からアセスメントすることを可能にする体験過程スケールを科学化の指標として位置づけた。

前章の考察で述べたことをふまえて、今後の技術・技法研究の課題を整理したものが図6である。

「知識→方法」の象限では、「今—ここ」での具体的な行動を、観察にもとづいて利用者と支援者が共有し、その意味を再所有していくための指標や技術を扱う必要があるだろう。あるいは、数量化できるような行動にターゲットを絞り、学習理論にもとづいて特定の行動を増やしたり消去できるような技法もありうる。このような、実感と行動という従来相反するもの

図6 技法分類の各象限における課題



(安井理夫 2009 年)

と考えられてきた2つを実存性から統合するための技術について、「知識→方法」、の象限における技法として詳しく考察していくことが必要である。

また、「方法→方策」の象限においては、分かちあおうとする意志を中心として、利用者自身が現実的な適応行動をマスターし、共生社会のひな型となりうるような社会生活や地域生活のあり方を提案できるようなセルフヘルプの支援形態についても整理が必要だと考えられる。

これら2つを、エコシステム構想における支援技法の課題としてあげておきたい。

注

- (1) 太田義弘「ジェネラル・ソーシャルワークの基礎概念」太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館 1999年 9-42頁を参照
- (2) 太田義弘「社会福祉と社会福祉援助活動」福祉士養成講座編集委員会編『新版社会福祉援助技術論Ⅰ 第2版』中央法規 2003年 16頁 矢上克己「社会福祉実践としてのソーシャルワークの内容」大和田猛編著『ソーシャルワークとケアワーク』中央法規 19頁など
- (3) 太田義弘「支援科学としてのソーシャルワーク実践と方法」『ソーシャルワーク研究』Vol. 28 No. 2 2002年 34-36頁
- (4) 安井理夫『実存的・科学的ソーシャルワーク エコシステム構想にもとづく支

援技術』明石書店 2009 年などを参照のこと

- (5) 安井理夫「課題解決と自己実現への支援スキル」太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著『ソーシャルワーク実践と生活支援方法のトレーニング』中央法規 2005 年 113-114 頁
- (6) ティリッヒ / 大木英夫訳「生きる勇氣」『ティリッヒ著作集第 9 巻 存在と意味』白水社 1978 年 136-137 頁
- (7) 池見陽編著『フォーカシングへの誘い 個人的成長と臨床に生かす「心の実感」』サイエンス社 1997 年 15 頁
- (8) 安井理夫「ソーシャルワークにおける技法の構成要素 技術の構成要素内の整合性を中心に」同朋福祉第 15 号 2008 年 172-173 頁
- (9) 太田義弘「社会福祉援助技術の体系」福祉士養成講座編集委員会編 前掲書 133 頁
- (10) 安井理夫「ソーシャルワークにおける技術の構成要素 ジェネラル・ソーシャルワークからの体系的展開」同朋大学論叢第 93 号 2009 年 58 頁
- (11) F. P. バイステック / 田代不二男・村越芳男訳『ケースワークの原則』誠信書房 1980 年
- (12) 諸富祥彦『カール・ロジャーズ入門 自分が“自分”になるということ』コスモスライブラリー 1997 年 60-63 頁には、ロジャーズがオットー・ランク (Rank, O.) とジェシー・タフト (Taft, J.) から大きな影響を受けたことが指摘されている。
- (13) D. メアーンズ『パーソンセンタード・カウンセリングの実際 ロジャーズのアプローチの新たな展開』コスモスライブラリー 2000 年 viii-x 頁
- (14) 「体験過程」とは、ジェンドリン (Gendlin, E.T.) が提唱した概念であり、体験とは固定的なものではなく過程であるという意味で、体験の進行形で表現されている。体験しているものにぴったりの表現が見つかり、あ、そうだ、と納得できるとその体験はシフトし、つぎの過程に進んでいくとされる (E. ジェンドリン、池見陽 / 池見陽、村瀬孝雄訳『セラピープロセスの小さな一歩 フォーカシングからの人間理解』金剛出版 1999 年などを参照)
- (15) 稲沢公一「構成主義・ナラティブ」久保紘章・副田あけみ編著『ソーシャルワークの実践モデル 心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店 2005 年 237 頁および 244 頁
- (16) F. S. パールズ / 倉戸ヨシヤ監訳『ゲシュタルト療法 その理論と実際』ナカニシヤ出版 1990 年 142-143 頁
- (17) フローレンス・ホリス / 本出祐之、黒川昭登、森野郁子訳『ケースワーク 社会心理療法』岩崎学術出版社 1966 年

エコシステム構想と実存的支援技術

- (18) A. E. アイビー / 福原真知子他訳編『マイクロカウンセリング』川島書店
1985 年

※ 同朋福祉編集委員会規定により「研究論文」としての査読済み

(本学准教授・ソーシャルワーク論)